

農業体験農園を視察し園主と談笑する前川耀男区長。今では全国に広がっている、練馬区発祥の農業体験農園は、区の管理農園とは異なり、園主の指導のもと利用者は種まきから収穫までの全てを体験できる。平成21年にはこの取組が評価され、日本農業賞大賞を受賞した



みどり豊かな空の広いまち

～緑被率・農地面積23区ナンバーワンの練馬区の魅力～

23区一豊かなみどりを誇る練馬区。

公園や農地などまちのみどりの豊かさと都市生活の利便性が両立しており、

その恵まれた環境や住みやすさから人口は増加を続けています。

自然環境を生かした公園や文化施設、身近に触れ合え食について学ぶことのできる農地など、みどり豊かな区の魅力を紹介します。

**豊かな自然と都市生活が
両立するまち**

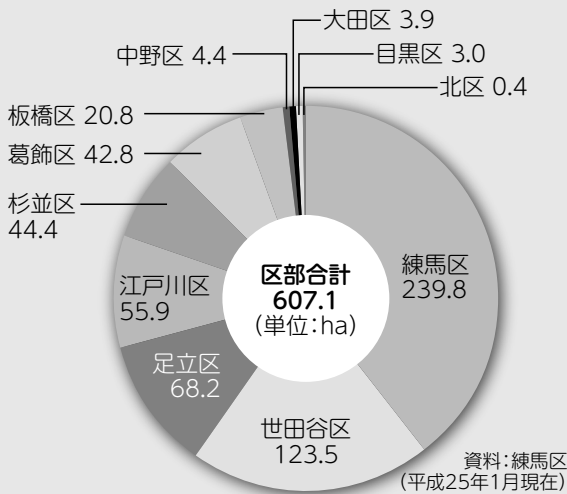
23区一豊かなみどり

練馬区は緑被率が23区で最も高く、風格ある屋敷林や農地が今なお多く残っており、昔ながらの風景の中で四季折々の自然を感じられます。農地面積も23区一広く、伝統野菜の練馬大根、都内生産量第1位を誇るキャベツなどが有名で、区民は季節の新鮮な野菜や果物などの農産物を身近に親しめます。農地以外にも、住宅地から少し入ると広い公園や緑地などがあるため、子育て世代にも人気の環境です。人口は23区の中で世田谷区に次いで2位ですが、子育て世代の転入が多く見られ、現在も人口が増えています。

近年、西武池袋線が、池袋・新宿・渋谷といった副都心を通る東京メトロ副都心線と相互乗り入れを開始するなど公共交通が整備されており、さらに今後、都営地下鉄大江戸線の大泉学園町への延伸や西武新宿線の高架化なども期待されており、利便性が高まっています。

また区内には、関越自動車道、東京外環自動車道といった高速道路や、川

東京区部の農地面積



大田区
北区
港区

葛飾区
板橋区
世田谷区

荒川区
新宿区
江戸川区

練馬区

渋谷区

特別区競馬組合

身近で、農を実感できるまち

越街道、環状七号線、環状八号線、目白通り等の都心へ結ぶ重要な幹線道路も走っています。

このように、自然の豊かさ、都心への交通の便がよく、にぎわいがある都市生活が両立している点が区の大きな魅力となっています。

都市農業は練馬を特徴づける大きな魅力のひとつです。都市化の進行に伴いまちのみどりが失われていく中で、農業のプロである園主の指導のもと、農業経験のない人でも安心して野菜づくりができる農業体験農園や地元農家

の畑をまわって収穫を楽しむ「野菜ウォークラリー」、区の伝統野菜である練馬大根の収穫体験、冬の恒例イベント「練馬大根引っこ抜き競技大会」、区内で摘み取り体験ができると評判のブルーベリー観光農園など、子どもから大人まで誰もが農にふれ、楽しめる機会がたくさんあります。

また、区内には生産者の直売所やJA東京あおばの共同直売所が約300か所もあり、区民は新鮮な地元の採れたて野菜をいつでも手に入れることができます。平成25年度の区民意識調査によると、回答者の5割近くが「地産地消」を意識しており、そのうち練馬産農産物を購入する理由は「新鮮だから」が8割を超えて最も多く、「地域の農産物を購入することで練馬の農業を応援できるから」「安全な食材だから」「おいしいから」「生産者の顔が見えるから」と続きます。こうした都市農業は区内だけでなく区外からの人も惹きつけています。

毎年7月になると区内にある30ものブルーベリー観光農園がオープンします。区のブルーベリーの栽培面積は約834アールと23区最大の広さを誇ります。郊外の観光農園よりも交通の便がよい各地から足を運びやすく、

昨年の来園者数約2万人のうち約2割が区外からの来園でした。

ブルーベリーの木は背が低いことから、小さい子どもでも実を摘み取ることができ、身近な夏休みのファミリーレジャーとしても人気です。区の土壌は酸性でブルーベリーの生育に適しているうえに、ブルーベリーの栽培は農薬の使用を他の作物より抑えることができるため、練馬区のような農地と住宅地が混在する地域でも周辺の環境にやさしく、より安全に栽培できます。

そのほかにも区では、練馬大根やキヤベツ、ブロッコリー、トマトなどが作られ、とくに練馬大根は、区立小中学校の給食で提供されると同時に、さまざまなイベントや食育を通して「農のまち・ねりま」をアピールしています。

農地は、都市部の住民の暮らしにとって、失ってはならない大切な財産です。季節ごとの旬の作物を供給するだけでなく、防災や環境、食育という多面的な役割を果たしています。

ヒートアイランド現象を緩和し、大雨の際には貯水機能

生産者のコインロッカー式無人販売所。生産者と消費者の距離が近く、新鮮な野菜が手に入りやすいのも区の魅力のひとつ



毎年7月上旬から9月中旬まで開園しているブルーベリー観光農園は、身近な自然に親しめるレジャーとして年々利用者が増加している

により、洪水を抑制します。震災や火災時には身近な避難場所としても機能します。一方、区では、都市部にある農地の役割を最大限に生かした都市型農業経営への支援に力を入れています。

現在、区の農業は、農業従事者の高齢化による労働力の低下や後継者不足といった課題を抱えています。区は、都市化の波の中で安心安全な農産物づくりに取り組む生産者たちを支援するため、平成27年3月に「(仮称)練馬区農の学校」を開設します。

「(仮称)練馬区農の学校」は、複数

「石神井公園ふるさと文化館」は、練馬区で育まれてきた伝統文化の継承・発展及び新たな地域文化の創造、観光振興を図る拠点として整備された



数多くあります。

平成22年3月に開館した「石神井公園ふるさと文化館」は、豊かな自然に恵まれた石神井公園に隣接し、区の歴史や伝統文化、自然などについて、体験しながら楽しく学ぶことができ、また、観光情報も発信する地域博物館です。「ふ（ふれあい）る（ルーツをさぐる）さ（さわれる）と（とりかえらるる）」をコンセプトに、常設展示では、資料に触れたり試したりできる「ハンズ・オン展示」や、実物大再現展示の手法を随所に取り入れ、子どもから大人まで楽しんで観賞できるようになっています。

平成26年4月には、そこからほど近い場所に、旧日本銀行石神井運動場のみどり豊かな敷地を生かし、自然、スポーツ、文化芸術に親しめる「石神井松の風文化公園」が開園しました。

公園の南側には三宝寺池があり、国の天然記念物に指定されている貴重な沼沢植物群落があります。運動場跡が開発されれば、この植物群落に影響が及ぶ可能性があります。区が用地を取得し、公園として整備することで環境は守られました。

広々とした芝生や地域の特徴的な景観であるアカマツの林など、約4・7

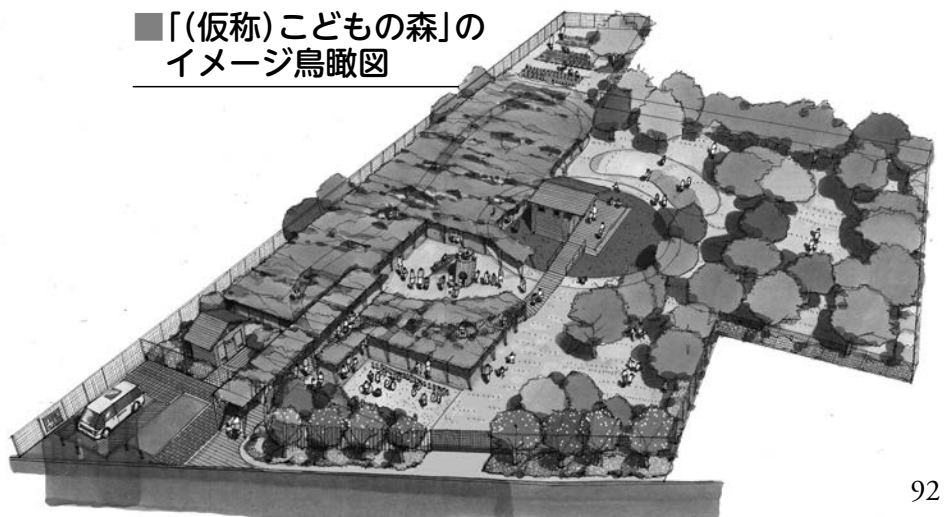
「(仮称) こどもの森」体験イベントの様子。森の木々に大人の背丈ほどの高さでロープを張り、歩いて渡るロープワークを子どもたちは楽しんだ



ヘクタールの大規模な公園で、敷地内には、テニスや少年野球、少年サッカーなどのスポーツ活動ができる庭球場や多目的広場も整備されています。また、公園管理棟の一部は石神井公園ふるさと文化館の分室になっています。

江戸・東京の近郊農村から人口71万人の都市へと発展した練馬区は、豊かな自然と都市の利便性を兼ね備えた土地として、これまで多くの文化人が暮らし、活動してきました。石神井公園ふるさと文化館分室では、五味康祐氏のオーディオ展示や檀一雄氏の書斎の再現展示等、練馬区ゆかりの文化人を紹介しています。

「(仮称)こどもの森」のイメージ鳥瞰図



みどりの力でわんぱくを育てる

平成27年度には、みどり豊かな区の特徴を生かし、木登りや穴掘りなど、都市にいながら自然の中で冒険遊びが楽しめる、これまでにない新しい公園「(仮称) こどもの森」を羽沢二丁目緑地予定地に開設します。

宅地化が進む中、次の世代を担う子どもたちが、みどりに囲まれた自然の

豊かなみどりの中で文化芸術が息づくまち

の講座を設け、農業従事者の支え手となる農サポーターを育成するとともに、講座の修了生が活躍する場(区内農家の畑)も「(仮称)練馬区農の学校」がコーディネートするという練馬区独自の取組です。受講生が土づくりから種まき、収穫後の処理までを学び、農業の基本的な技術を習得する場となり、支え手が必要とする生産者にとって、修了生が大きな力となることが期待されています。

区内には、豊かなみどりの中でスポーツや文化芸術の体験ができる施設が

光が丘公園のハーフマラソンゴール地点。
光が丘公園は区最大の公園で、区立図書館や体育館も併設されている



中で自由に遊べる場所が必要になって
います。

「(仮称)こどもの森」は、練馬の原風景である雑木林などのみどりの中で、子ども自らが遊びを見出し自由に遊べる空間とします。そのため、遊具は遊びのきっかけをつくる最小限のものとどめ、「冒険体験(自由な発想を生かした創造的な遊び)」「自然体験(練馬のみどりを生かした自然観察や農体験)」「交流体験(子ども同士や地域住民との交流)」といった「子どもの原体験」空間として整備します。これら

の体験を通じて、みどりの豊かさを実感し、地域のみどりを保全する意識も高めることができます。

区では、平成23年度から7回にわたり、自由に遊べる体験イベントを実施し、延べ4000人を超す参加者の意見を参考にしながら検討を進めてきました。

体験イベントへの参加者からは、「子どもたちが自由に遊べる場は大切」、「子どもだけでなく、大人同士も交流ができた」、「都内でこういう場所はとても貴重」、「子どもたちは大変喜んでいたので常設になってほしい」、「土の匂いに気がついたり、泥んこの感触にびくびくしたりと、五感全てを使って遊んでいる様子に満足した」など、「(仮称)こどもの森」の常設、定期的な開催を希望する声が多くありました。

また、区民からは、「子どもが小さいうちは公園で遊べたが、小学生になると校庭開放以外に走り回れる場所がない」「あまり手を入れ過ぎることなく秘密基地的な場所を遊び場として継続して開放してほしい」等の意見も上がっています。

このようにみどりの資源を生か

し、子どもたちが自由に遊ぶことができる遊び場づくりに自治体を取り組むことは、23区でも珍しい試みです。

ビジョンの策定で新たな練馬へ

平成27年3月には、「練馬こぶしハーフマラソン」を実施し、23区最大の都市農業や伝統文化等多くの誇るべき練馬区の魅力を区内外に発信します。

ハーフマラソンのスタート及びゴール地点となる都立光が丘公園は、例年この時期にはたくさんのおふしや桜が咲き誇るため、ランナーは美しい木々に囲まれて春を満喫しながら走れます。

大会は河川敷などを利用せず、笹目通り・目白通り・環八通り(環状八号線)・川越街道など区内主要幹線道路を含むコースの90パーセント以上が公道であることが特徴で、参加する5000人のランナーは、普段走ることのできない車道を走ることができま

す。区外の参加者や応援者へも豊かなみどりと利便性の高い環境といった区の魅力をアピールしていきます。

都市の利便性と農地などのみどり豊かな環境の良さが区の魅力です。こうした魅力を最大限に生かしながら、区は今後もまちづくりを進めていきます。

4月に就任した前川耀男(まえかわ

あきお)区長は、「区は十分なポテンシャルを持つている」と語ります。

区長は就任以来、その現場を自身の目で確かめてきました。リアルな行政需要を把握するために、各分野の関係者と積極的に意見交換を行うなど、現場で活動に携わっている人々との交流を重ねています。

現在、区は、区の未来を見据えた区政運営の新しいビジョンの策定に向けて取り組んでいます。

ビジョンは、政策の基本的な方向を明らかにする策定方針を定め、練馬区の現状と将来を示す白書、長期的な方向性を示す構想、そして、向こう5か年の取組を示す戦略計画などからなり、練馬区のさらなる発展に向けて、現在急ピッチで策定作業を進めています。

前川区長は、就任以来現場に足を運び、視察や関係者との交流を重ね、生活実態に即した区民のニーズを把握するよう努めている

